



様式第1号

令和〆年〆月〆日



真庭市議会
議長 小田康文 殿

真庭市議会議員 浅野 和昭 印

調査研究、研修会、要請・陳情活動届

政務活動費を使用して、下記のとおり研究、調査等を行いますので届けます。

記

1. 区 分 調査研究 研修会 要請・陳情活動

2. 訪 問 先

宮城県石巻市 大川震災伝承館 (大川小学校)
宮城県仙台市 震災遺構 荒浜小学校
" せんだいふじメモリアル交遊館

3. 内 容

〆月〆日 - 〆月
- 災害時における~~大川~~ガードマップの学習
- 災害時における児童の避難経路の学習

4. 行 程

5. 事務局から訪問先への依頼 必要 不要

(注) 複数の議員で実施する場合、代表者の届けでよいが、参加議員名簿を添付すること。

浅野 和昭

視察

	2022/4/6 (水)	2022/4/7 (木)
4:30出発		
7:00	神戸空港 飛行機 7:50-9:10	
8:00		
9:00		
10:00		荒浜地区住宅基礎
10:30		震災遺構荒浜小学校
11:00	福島県 (富岡町)	せんだい3.11ミレニアム交流館
12:00		
13:00		女川町
14:00	福島県 (大熊町)	
15:00	福島県 (双葉町)	石巻市・大川小学校伝承館
	双葉町・震災伝承館	
16:00	浪江町 (請戸見晴台)	
17:00	浪江町	
18:00		
19:00		仙台空港 飛行機 19:35-21:00 神戸着



様式第2号

報告書



令和 4 年 4 月 21

真庭市議会議長 小田 康文 殿

報告者 真庭市議会議員 氏名

浅野 和昭

下記のとおり政務活動費を使用して 調査研究・~~研修会~~・~~要請陳情活動~~をいたしましたので、その結果を報告いたします。

1	日 時	自 令和 4 年 4 月 6 日 (午前・午後) 11時00分 至 令和 4 年 4 月 7 日 (午前・ <u>午後</u>) 16 ¹⁷ 時00分
2	場 所	宮城県石巻市釜谷字韭島94 石巻市震災遺構大川小学校 宮城県仙台市若林区新井字杓形85-4 せんだい3.11メモリアル交流館 福島県双葉郡浪江町両竹本町1 福島県復興祈念公園 (見晴台)
3	用 件	東北大震災により犠牲となった児童、住民、地域の実態とその後の生活と教訓を学びに視察を行いました。
4	概 要	浅野和昭 1名

報告書 (継紙)

宮城県石巻市立大川小学校74名の児童と教職員10名は東日本大震災の9, 7メートルの津波で犠牲となりましたが、正確には学校のずさんな防災管理で犠牲になったことが遺族の訴訟により明らかにされ、本来であれば犠牲にならずに済んだ大切な命でした。

大川小学校の児童には津波から避難する「時間・情報・手段」が全て揃っていましたが、学校管理下における判断と行動に誤りがありました。

地震発生から学校への津波到来までは51分もあり、市の広報車や災害無線が高台への避難を呼びかけ、近隣住民と保護者も学校に来て裏山への避難を呼びかけ、児童も裏山への非難を訴えて6年生の一部は実際に裏山に避難したにも関わらず教師によって校庭に呼び戻されました。

避難用のスクールバスも待機して数か所への避難場所への移動も可能であったがバスに乗車させませんでした。津波被害に遭った時に先頭の児童が移動した距離は校庭からわずか150メートル、しかも向かった先は行き止まりでした。更に目的地とされた高台に到達できていたとしてもそこも津波に襲われた場所で、意思決定の遅さに加えて何重にも判断の過ちがありました。

避難すれば助かったとされる裏山は、児童が毎年シイタケ栽培の体験学習を行っていた場所で、低学年でも素早く容易に登れる慣れ親しんだ山でした。

宮城県では2003年から各校に対策を見直すように指示が出していましたが大川小学校は見直しをしておらず、マニュアルには津波発生時は「近隣の公園・空き地への非難」と記載されていました。ところが実際には近くに公園も空き地もなく、そのマニュアルは保護者に共有されていませんでした。小学校に勤務する職員達も近隣の地理や避難場所を把握していなかった事が誤った避難経路への判断につながったようです。

警報が鳴り響く寒い校庭の中でじっとしゃがんで不安を抱えていた子どもたちと、学校の前に泥だらけになった小さな遺体が並べられた遺族の事を思うと胸が張り裂けそうです。

学校と教師は子どもたちの命を守ることでできる尊い場所であり職業です。管理を怠った学校長に責任がありますが、そのことを追求しなかった市や県にも責任があります。視察では実際に子供たちの避難経路、目指した高台、裏山へと自分の足で歩いてきましたが、なぜ？という疑問がいくつも重なりました。

昔の、遠く離れた場所の他人事ではなく、ずさんな管理が重なった時にはどこにでもあり得る人災であったと考えます。地域に応じた防災の教訓にしたいと思います。

仙台市立荒浜小学校では災害の1年前に校長先生が「津波が来た場合には校舎2階まで到達するかもしれないので移動するように」と指示し、備蓄品を2階から3階に移動して津波被害時に食料と毛布を守ったそうです。震災当日は雪が降る寒い日だったそうですが、避難してきた住民の方と児童たちは毛布があって良かったということでした。

せんだい3. 11メモリアル交流館では職員の石坂さんと荒浜地区で被災した語り部の花渕さんが当時の様子やその後の対応と今後の課題を話してくださいました。交流館設立の由来は、被災により人が住めなくなった5つの地域の方々が交流館に集まり、週百年続くそれぞれの地域の文化や風習と伝統を途絶えさせないために交流するためでも

あると教えていただきました。

仮設住宅は狭くて家族の人数が多い世帯は分かれて暮らすことになったが抽選のために離れ離れに暮らすことになった方がおられた事、家族の絆が薄くなった方々、仮設住宅の中で築いた友人や仲間の人間関係も住宅を出たら付き合いがなくなった事、仮設住宅を出て一人暮らしになって孤独死をする方が多い事、どなたの家族が被害に遭ったかわからないので会話には凄く気を使い、嬉しい話があっても周りの目を気にして素直に喜べなかった事など長期に及んだ仮設住宅での生活を教えていただきました。

被災後一か月間は避難先でお年寄りのお世話をしていたそうで、誰とも会えずに連絡も取れていなかったのも自分も亡くなったと思われていたそうで、知人に再会した時にはとてもびっくりされたそうです。

花洲さんも鬱になったそうですが、生き残った者の責任として震災を後世に伝えるために語り部を引き受けたそうです。

震災直後は電話もつながらず、警察や消防もこないのが治安が悪く、女性や子供は家から外出できなかつたそうです。

花洲さん自身が当時住んでいた荒浜地区は800世帯2,200名の方が暮らしていたそうですが、ご自身の家も含めて地域の全ての家が津波で流されたそうです。介護施設で働いていたが避難が早かったのが助かったそうですが、デイケアの仲間はお年寄りとともに車に乗ったまま流されて亡くなったそうです。自身はお年寄りの薬を預かる立場にあったので担当していた全員の5日分の薬を持っていたそうで「命に係わる大切な薬は万一に備えて5日分は用意しておくように」とアドバイスをいただきました。

「心の復興はこれから始まる」という言葉が印象的でした。

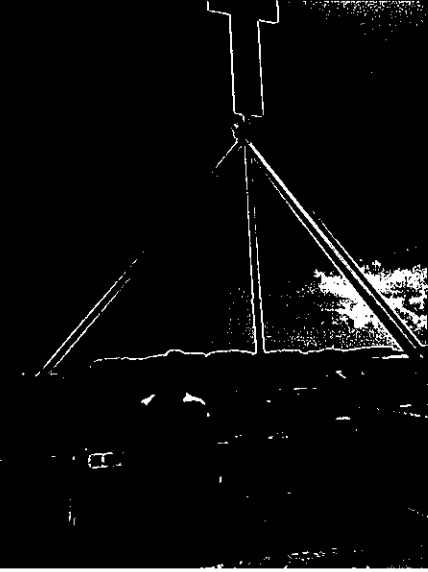
荒浜地区にある震災遺構には当時の記録として津波によって2メートルもえぐれた土地を残しており、その威力に恐ろしさを感じました。

荒浜地区の海岸から約4キロ先までの平坦な土地を時速250キロの津波が押し寄せ、地震による液状化現象、道路の陥没や崩壊、乗り捨てた車が邪魔で避難できなかった方が多くいたそうです。日中の地震でしたが犠牲者には未就学児や若い方も大勢の名前がありました。

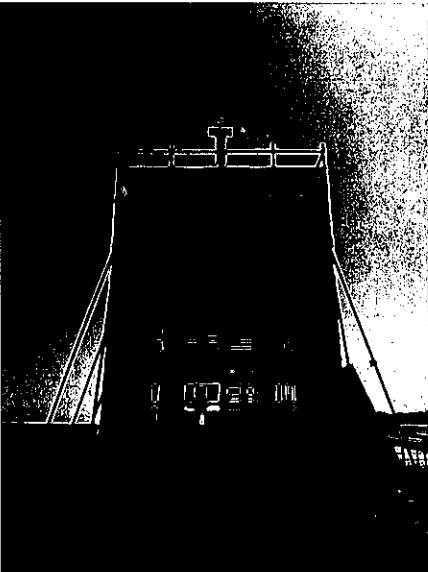
海沿いは新しく作られた高い防潮堤によって海が見えません。道路標識には「津波浸水区域ここからここまで」、「津波浸水境界地点」、「過去の浸水区間」などの看板が至る所にあります。人が住めなくなった地域はただただ平坦な土地が果てしなく続いています。

仙台市は百数十年に一度の津波が来ても被害に遭わないように土地の一部を住居禁止地域とし、防災林やかさ上げ道路、避難道路と避難施設を点在させた街づくりを行っています。

福島県は津波被害の大きかった富岡町、大熊町、双葉町、浪江町を視察しました。2021年に避難指示が解除されましたが、東京電力の原子力発電所に近づくにつれて通行できない道路が多く、高速道路や町の至る所に現在の放射線量を掲示したパネルがありました。避難解除された町並みはどこにでもある風景でしたが、国道沿いにある大きな病院や自動車ディーラー、大手寿司チェーン店や家電量販店や衣類販売チェーン店はガ



福島県浪江町請戸地区 福島県復興祈念公園予定地



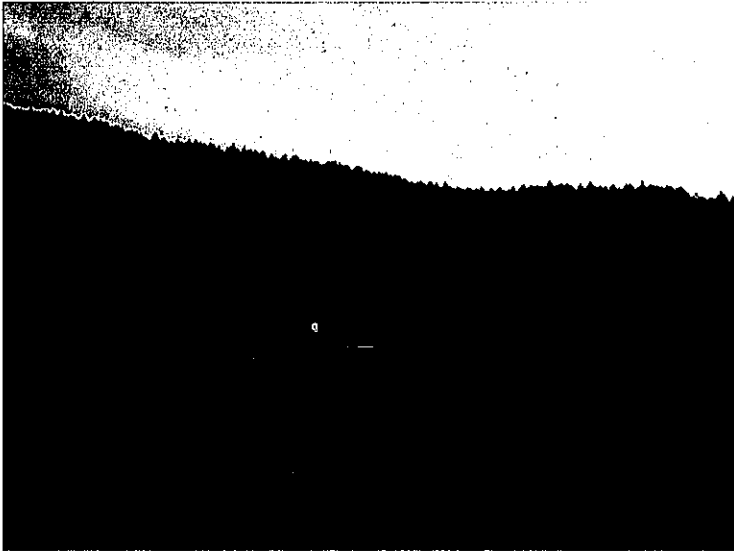
福島県浪江町請戸地区 福島県復興祈念公園予定地



せんだい 3.11 メモリアル交流館



せんだい3.11メモリアル交流館



宮城県石巻市立大川小学校の遺構